



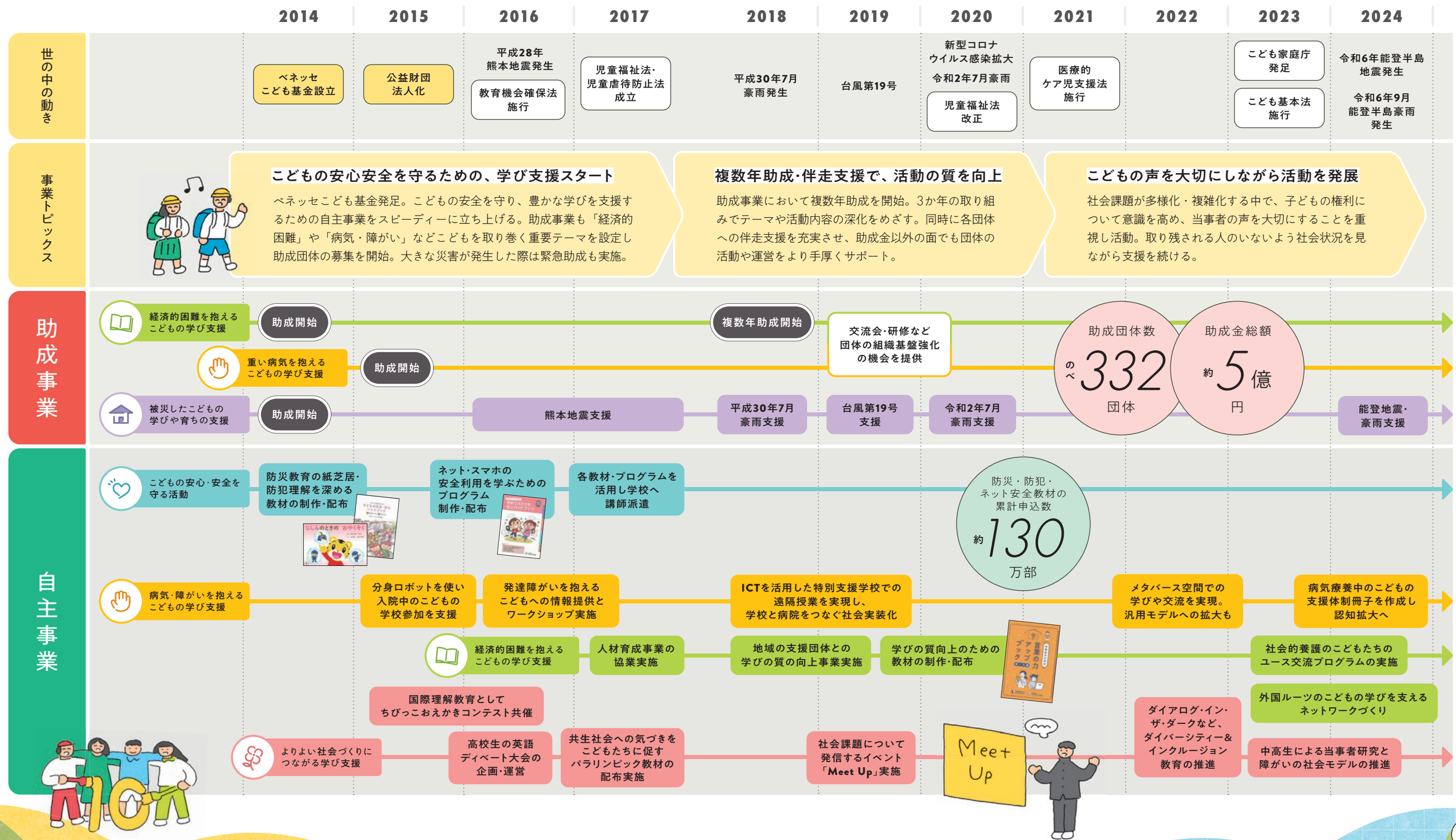
支援の輪が広がった10年を振り返る

10-Year History

皆様と共に、こどもの学びを支援してきたこの10年。これからも活動を深めていきます。

- vision** — こどもたちが自らの可能性を広げられる社会をめざし、「こどもの学び」を支援します。
- mission** — 制度から抜け落ちて支援が行き届かない領域を見極め、助成事業と自主事業の両面から社会課題解決に取り組みます。

10周年特集
ベネッセこども基金10年間の歩み





「こども×学び」支援のこれまでとこれから

学びから生活・体験へ 広がり続けたこども支援

青木 ベネッセこども基金設立10周年の節目に、この10年のこども支援とこれからについてお話をうかがいます。まず、自主事業や助成事業で協業してくださった李さんにお聞きます。

李 「経済格差が教育格差となり貧困の連鎖を生む」ということが注目され、この10年で学習支援は大きく広がりました。厚労省や文科省の制度も進みましたが、貧困率が下がり切らない中で虐待や不登校、こどもの自殺は増え続けています。こどもを取り巻く環境は複雑で深刻です。こどもたちの家族の生活を支えることも必要だと痛感しています。

10年支援してきた子が20代になり、高校を出ても就職先が見つからない、就職できても離職してしまう、生活保護世帯ではアルバイトで学びが圧迫されるなどの現実を多数見てきました。学びの支援から出発した私たちも、「家庭丸ごと」の生活支援を包括的にやらざるを得ない状況です。

青木 包括的な支援には行政との連携も不可欠ですね。

李 我々の団体は自治体のデータベースで困難度に応じたリスクフラグを立て、抽出したこどもにアウトリーチする取り組みも進めています。つくば市では子ども政策アドバイザーとして、市長、教育長、福祉部長などと定期的に会議を持ち、縦割りの隙間をつなぐ役割を担うようになりました。

本来は、さらに生活保護、虐待相談、家計相談など複数の窓口がNPOなど民間の支援に接続され、ひとつの相談から多面的な支援を組み立てられるとよいのですが、そこはこれからの課題ですね。

青木 ベネッセこども基金理事の佐久間さんは、こどもの生活により近い現場もお持ちですね。



認定NPO法人 Learning for All 代表理事
李 炯植
ベネッセこども基金と、自主事業・助成事業で協業

すべてのこどもの
人権が守られる社会に



ベネッセこども基金理事
佐久間 貴子
株式会社ベネッセスタイルケア
取締役 常務執行役員
こども・子育て支援カンパニー
カンパニー長

佐久間 保育園や学童はこどもにとって毎日の生活の基盤です。私たちは、こどもにとって安心できる居場所であること、ここにいていと思える空間や関係性づくりを大切にしています。こども家庭庁から発信されている『はじめの100か月の育ちビジョン』にもあるように、「安心と挑戦の循環」が日々の生活の中にあることが大切です。その環境があって初めて、こどもは学びや挑戦に向かうことができますと思います。安心できる居場所づくりはとても重要だと感じています。また最近はその子どもの権利条約の4つの原則の一つ、「子どもの意見の尊重」の大切さについてよくスタッフと話をします。

青木 何か具体的な出来事があったのでしょうか。

佐久間 小さな事例ではありますが、いろんな色や形を組み合わせる玩具の小さなパーツの片付けについて、大人が決めたルールではうまく片付けができなかったこどもたちが、こども同士で何度も話し合っ片付け方法を決めたら、スムーズに進められるようになり、創作意欲まで変わってきたということがありました。こどもの声を大人が聞き、信じて任せていくなど、日々の小さな合意形成の経験を、保育園や学童という生活の場から積み重ねられるようにしていきたいと考えています。

また近年は自然災害が頻繁に起

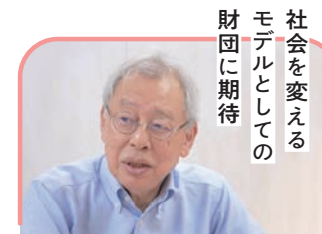
こっており、災害時には、こどもたちの遊びや学びの機会が唐突に断たれることもあります。制度で守られにくい領域へ基金が届くことに、大きな意味を感じています。

これからの10年 社会に働きかける財団として

青木 耳塚理事はベネッセこども基金の発足時から、理事として助成事業の選考に関わってこられました。この10年でどのような変化を感じていますか。

耳塚 当財団にとって、成長と発達が見られた貴重な期間でした。どの団体を支援すべきかが見え、助成の枠組みも磨かれましたし、学び支援を学校の学習から体験へと拡大してきました。助成団体に寄り添う態勢も充実しました。設立時の、「こどもの学び支援を軸に中間支援に徹し、モデル性の高い事業を採択して行政の公的プログラム創設につなげる」という発想は、極めて優れていたと思います。

一方で、こどもを取り巻く課題の深刻さは一層明瞭になりました。直近の全国学力調査では家庭の社会経済的地位が低い層ほど子の学力の低下幅が大きい傾向があり、格差が拡大しています。貧困対策や学び支援はますます必要です。さらに文化的貧困にも目を向けねばなりません。家庭にある本の冊数や親の読書習慣、大人との会話などの文化的環境は、学業や将来の多様な生き方に直結します。



ベネッセこども基金理事
耳塚 寛明
お茶の水女子大学名誉教授

これからの10年
現場を支えて
社会を動かす力に



ベネッセこども基金 事務局長
青木 智宏

文化は「相続」される。逆に言えば、経済が乏しくても文化的行動はこどもに受け渡すことができるのです。

教育と福祉の制度は分立し、責任主体も異なりますが、こどもにとっては一つの生活です。企業活動は効率化の名の下で、多くの敗者を生む構造がある。その社会でこどもの学びと生をどう支えるかを問い続ける必要があります。

青木 最後に、これからの10年に向けて一言ずつお願いします。

李 経済的にも文化的にも、外国ルーツや不登校の子にも——さまざまな場面で分断は確実に深まっていくと思います。公教育や地域の学びの場を通じて社会統合をどう実現するか。ベネッセこども基金にも、活発な議論と行動を期待しています。

佐久間 「Benesse／よく生きる」という理念を大切に、学びを軸に制度の狭間にいるこどもの声を拾い上げてください。こどもの意見を尊重する社会を広げる後押しをお願いします。

耳塚 ベネッセこども基金自体がモデルであり続けてほしい。助成の仕組みを磨くだけでなく、企業や行政を動かし、社会を変える力を持つ存在であってほしいですね。

青木 モデル性の高い事業への支援を通じて、社会に働きかける財団として、こどもたちの「よく生きる」を支え続けてまいります。今後とも皆さまのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

「学び」が 前向きに生きる力につながる



「重い病気を抱えるこどもの学び支援活動助成」
助成団体「シャイン・オン・キッズ」こども企画室メンバー

あきこさん(高校3年生)

中学受験目前で急性リンパ性白血病と告知を受け、約2年半の治療を経て寛解。現在は小児がん経験者として自身の経験や想いを伝えるべく、「シャイン・オン・キッズ」のボランティア活動等に取り組んでいる。

ベネッセこども基金の関わり

団体への助成に加え、こども家庭庁や国際小児がん学会アジア大会で、当事者のこどもたちの声を支援者に伝える場をつくらせていただきました。

≫ 学びへの意欲が前向きになる力をくれた

病気がわかった瞬間、「これまで頑張ってきた受験勉強がすべて無駄になってしまわないか」と、ショックで頭が真っ白になってしまいました。しかし、周りの方々は私の「受験したい!」という想いを汲んで、試験を受けられるよう奔走してくださいました。医師、学校、両親、誰一人欠けても受験はできなかったし、学ぶことをあきらめなくて良かったと今でも感謝の気持ちでいっぱいになります。「勉強は、病気が治ってからにしよう」と言われることもありましたが、当時の私は「合格した中学校に行きたい!だから回復に向けて頑張る!」という強い気持ちがあったからこそ、治療を前向きにとらえる心が持てました。



院内学級は、入院中も学習進度が遅れないよう勉強ができるありがたい環境でした。

≫ 伝える活動にも積極的。 「“今頑張る誰か”を応援したい」

現在は、「今頑張る誰か」がより良い治療に取り組める状況をつくりたい」という気持ちで、私の経験や想いを伝える活動にも取り組んでいます。2023年には、こども家庭庁での交流会で当事者としてお話を機会を、2024年には「国際小児がん学会アジア大会」で発表する場をいただき、小児がんを経験した自分だからこそわかることを多くの方に伝えることができました。特に嬉しかったのは、大人の方々がまっすぐに話を聞いてくださり、その場で改善点や実行できることまで具体的に提示してくれたことです。「当事者の声を伝える機会」の大切さに気づかされました。



「国際小児がん学会アジア大会」ランチョンセミナー(ベネッセこども基金とシャイン・オン・キッズの共同開催)での発表の様子。英語でのプレゼンでは、特訓の成果を出すことができました。

≫ 患者と家族に寄り添える 小児血液内科医になりたい

治療の経験から、心の持ち方がいかに大切かを学んだ私だからこそ、将来は「コミュニケーションを通じてこどもの想いを感じとり、その人のやりたいことを誰よりも尊重できる小児血液内科医」になりたいと考えています。現在は、医学部合格をめざしてまた受験勉強を頑張っています。大学生になったら、院内ボランティアとしてこどもたちの勉強のサポートにも挑戦したいです!

voice

認定特定非営利活動法人 シャイン・オン・キッズ
砂川未夏さん

あきこさんの話はいつも、「私たちが頑張らなくちゃ!」という熱い気持ちにさせてくれます。こども家庭庁など公的機関での発表をベネッセこども基金の皆さんと一緒に実現できたことは大きな一歩でした。これからは私たちは、こどもたちの笑顔や彼らの声を活動の起点にして、「黒子」になってこどもたちの想いを具現化するという姿勢を一貫して持ち続けていきたいです。



人として対等に意見を伝え合う カナダでの体験が、自信と力に



自主事業「カナダの社会的養護の当事者ユースとの交流プログラム」参加

ゆあさん(高校3年生)

児童養護施設で生活することを対象としたプロジェクトで2024年7月にカナダ・トロントに渡航。外国の文化に興味があり、将来の留学を見据えて現在は語学の勉強にも励んでいる。

ベネッセこども基金の関わり

プログラムの企画と、研修の運営に関わらせていただきました。(p.15-16にて紹介)

※本事業は、特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン、社会起業家白井智子氏、NPO法人チャイボラとの協働事業で、トロントの菊池幸氏と共に実施したものです。

≫ 誰とでも対等に意見を伝え合うカナダの若者たち

トロントではまず、現地の社会的養護経験者と交流する場がありました。彼らは私の話を「一人の人として対等に」聞いてくれていると感じました。「昔は荒れていた時もあったけれど、施設で出会った人のおかげで人間性が変わったんだ」と赤裸々に話してくれた方がいて、私だったら、「この話はしないでおこうかな」と心に秘めておくようなことも、話せる、そして周りが受け入れてくれるカナダの文化に触れることができ、視野が広がりました。



現地交流の様子。カナダの若者が積極的に自分の意見を言う姿が印象的でした。



≫ 「自分の言葉が伝わる」ことを実感。 達成感と自信がついた

交流の場では何度も言葉の壁にぶつかりました。でも、身振り手振りや知っている単語を使ってなんとかコミュニケーションをとろうとしたら、相手にも伝わり、そのやりとりがとても楽しいものになりました。またトロントの研修の中では、私たちが大人に伝えたいメッセージを考え、発信し、意見交換をする「こどもアドボカシー公聴会」というプログラムに取り組みました。オンタリオ州議事堂という大きな舞台上、国籍を越えてさまざまな大人に向けて発表できたことが大きな自信になりましたし、これまで心に溜めていた考えを伝えられて、気持ちがすっきりしました。



「公聴会」の発表準備では、チームで夜遅くまで話し合い、お互いの経験や想いをよく知ることができました。

≫ 「公聴会」での経験が 帰国後の“挑戦”の原動力に

トロントでは定期的に施設間の交流の場があるという話を聞き、「日本でも同じようなことができたなら…」と考え、自分の施設の職員に伝えました。すると、実際に県内の複数の施設で見学・意見交換会が実現したんです。新しいことに挑戦するのは勇気があるし、怖い気持ちもあるけれど、今後も自分から行動していきたいと思っています。

voice

社会起業家
白井智子さん



初めての異国で体力的な限界に挑戦しつつ、ひたむきにあらゆる事象から学びを得ようと頑張ったゆあさん。帰国から10か月後の研修で「このプロジェクトでは色々なチャンスに巡り合えて嬉しい」と語ってくれて、泣けました。関心の方向に素直に従ってグローバルな進路を選んだことも嬉しいです。その大きなきっかけを、ベネッセこども基金さんと共に創れたことに感謝しています。

